

随 想

編 集 委 員 会 今 昔

堀 川 一 男*



大学に入つて間もなく鉄鋼協会に入会したので早くも会員歴 30 年になる。在学中から「鉄と鋼」の文献抄録欄へ投稿したりしていたが、終戦後は佐藤忠雄氏、菊池浩介氏、入一氏ら上司のアシスタントまたは代理として講習会や出版書の企画など協会事業のお手伝いを始めた。

また「鉄と鋼」の編集や講演大会の運営などに関係するようになってからもすでに 20 年に近く、春秋の大会にはほとんど参加してきた。まだ青二才の頃から鉄鋼協会と共に歩み、数々の委員会に出席しつつ今日に至つたが、今や老人組になり感慨無量である。終戦直後は会員数も 5 千名足らずで事務局も金谷主事以下女性も含めて 5 名であつたが、今では会員数 1 万以上を擁し事務局も 40 名になんなんとし、実にめざましい躍進を遂げたものである。昨年はからずも常務委員を拝命したが、この間終始平委員で通してきたのでつい無責任にその場の思いつきなどを発言して迷惑をかけたこともあり顧みて洵に恥ずかしく思う。編集委員会には大学や研究所の新進気鋭の士や各社の優秀な若手が集まるので議論に情熱があり、また最新の学術知識によつて相互に啓発されるところが少なくない。

編集委員会で最も忙しいのは春秋 2 回の講演大会の論文審査とプログラム編成の時期である。沢山の論文を処理しなければならない上、時間的に尻を抑えられているので、夜を徹する覚悟で熱海や箱根にある大手会社の寮に泊りがけで作業するのが常である。仕事を終えて一風呂浴び、杯を酌みかわしながら歓談する時の楽しさはまた格別で、会を円滑に運営する上で非常に有効であつた。昔は講演の数も比較的少なかつたので楽であつた。昭和 23 年頃毎季 100 件程度だつた講演数が昭和 34 年頃まではほぼ横這いであつたが、その後次第に増加しはじめ、特に昭和 41 年から急激に増加して昭和 43 年にはついに 300 件をオーバーしてしまつた。その上開催の時期と場所を同じくする金属学会の方の講演数も最近では 400 件を超えているので、会場の選択、論文の審査、プログラムの編成などに頭の痛い問題が起こっている。

まず講演会場の問題であるが、昔は 3～4 会場もあれば十分であつたが現在では 8 会場に膨れ上がっており、しかも金属学会も同じ構内でという条件では、現在のように大学の教室を借用することに決めているとこれ以上に会場数をふやすことは困難となつてきている。その上大学必ずしも講演会場として最適の条件を揃えているとは限らず、ことに昨今のように正常な状態にない時世では是非学会専用の建物が欲しい。もちろん当協会で専有することは無理であるが日本工学会（現在 56 の学協会が所属している）、日本学術会議などに働きかけて他学協会と共同で利用する形をとれば利用度が高まり実現性がある。それまでの間は討論会形式の講演も軌道に乗つてきているので一般講演の講演時間を現在の 20 分から 15 分に短縮するとか、会場と会期を専門別に分けて開催するなどの対策が必要となつてくるかもしれない。いずれにしてもせつかく会員が講演することを強く望んでいるのであるから、講演を制限するような措置はなるべく避けたいと思う。

次に講演論文の審査であるが、以前は各委員が割当てられた数篇の原稿を自宅に持帰り 10 日間位か

* 本会常務委員 日本鋼管株式会社技術研究所副所長

けて熟読吟味し委員会の席上で1篇ごとに要旨を説明して慎重に取捨を決定して貰ったのであるが最近では講演数の激増とできるだけ提出締切期日をおそくして少しでも新しいデータを発表しやすいように努めているためもあつて、「その内容が鉄鋼の学術技術に関連があるか」「宣伝的なところがないか」「体裁が執筆規程に抵触していないか」などをチェックする位が精一杯となつている。またプログラムの編成であるが、鉄鋼協会と金属学会の両学会を通じて同一専門分野の講演を全部聴講できるように組むのが理想であるが講演数の増加によつて技術的に非常に難しくなつた。講演をその内容によつて適当に分類し国鉄の「緑の窓口」のように電算機を利用することによつて短時間内に最適なプログラムを組むことができないものであろうか。討論会のテーマについても現在共同研究会や研究委員会へのアンケートを参考にしてその都度論議決定しているが、日頃から各種研究会や刊行物などの動向を調査しておき電算機などで整理すれば合理的に最適のテーマを選ぶことが可能であろう。

最後に協会の技術情報サービス活動についての夢を述べたい。周知のようにわが国鉄鋼生産の上昇はめざましく昨年は粗鋼で6689万tに達しアメリカ、ソ連につぎ世界第3位、シェア12.7%を占めるにいたつた。10数年前にくらべると実に10倍以上という極めて高度の成長を示している。しかしこの繁栄は海外技術の導入によるところが大きい。ところが最近では外国企業にとつて日本の企業が強力な競争相手として意識されてきたので当然の結果として技術導入が難しくなつてきている。そこでわが国独自の技術を開発する必要に迫られ研究開発部門に重点を置かざるを得ないわけであるが、開発研究を行なう場合に同じ研究がすでに世界のどこかで行なわれておればどの程度まで進んでいるか、特許で縛られてはいないか、また関連分野の状況はどうかなどを調査する必要がある。しかし世界中で公表される科学技術の論文は学位論文、レポート、学会発表、資料などを加えると年間300万件(定期刊行物5万種)もあり、特許は約70万件にもおよぶといわれており、これらの量は約10年間で倍増すると推定されている。このように膨大な情報の中から研究に関係のあるものを入手するには相当な時間と労力がかかる。そこで研究者にあまり多くの時間と労力をかけさせないで必要にして十分な情報を迅速に提供するために、あらかじめ鉄鋼技術に関するあらゆる情報を収集して抄録、索引などを作成保管しておく情報サービス機関が欲しいわけである。イギリスでは鉄鋼協会が1960年以後に世界で発行されている1100種類の定期刊行物の中から鉄鋼関係の文献を選んでカード化しUDC分類を付して現在までに7万8千枚を作製頒布しており、ドイツでも鉄鋼協会が独自の方法ですでに80万枚の文献カードを作製し保管していると聞いている。わが国では科学技術情報センターが科学技術文献速報の金属工学編に毎月約1000件、鉄鋼連盟の製鉄技術総覧が毎月約500件の文献抄録を刊行している。しかしいずれも質量ともに満足ではない。かといつてこれを各企業が別個に計画するのでは尚更完璧は期し難く、重複のロスも莫大である。そこで鉄鋼協会が中心となつて鉄鋼技術関係の公知情報を広範に収集してその中から必要な項目を抽出して抄録し、分類カード化を行なつた後電算機に記憶させておき、要請のあつた都度該当するものだけを篩い分けてその和文抄録を提供することはできない相談だろうか。各研究所あるいは会社に端末機を備えておけば、タイムシェアリング方式(TSS)により協会に設置されている電算機から直接即刻に情報を受けることも可能である。幸い、科学技術庁が44年度から3カ年計画で科学技術文献の電算機による情報検索に欠くことのできないThesaurus(情報検索用語関連辞書)の編集に取り組むことになつた由であり、日本科学情報センターでも情報処理機械化5カ年計画を推進中と聞いているので、この夢も案外早く実現できるかもしれない。